

# 三河 アララギ

平成二十七年

四月号

第六十二卷 第四号



ニューヨーク日記(102) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

January 16, 2015 : Upland Restaurant

Blue Shoe Diaries



好きなシェフ、Justin Smilieの新しいレストラン開いたよ! Upland って言う所なんだけどちょっとカリフォルニア風のメニュー。素材を活かしたものばかり。その中でもこれ、舞茸を丸ごと揚げたのがすごくいい! 軽いクリームをちょっと付けて食べても美味しいけどそのままでも全然いける! 大きすぎるかなと思ったけどぺろりでした。他にもポークチョップ (crackling porcelet) もヤバイからミスらないように! バリバリの皮!

Upland by chef Justin Smilie is open! And it's so yummy. One of the dishes that's making it's rounds around foodies and critics is the whole crispy fried maitake mushroom, cloumage + herbs and it's so lovely. Woodsy, mushroomy, crispy but not crunchy, maitake flavor totally shines. Also, not to be missed is the crackling porcelet. OMG, that crispy skin!

# 目次

## 第六十二卷第四号(通卷七三六号)

表紙	アーティチョーク
ニューヨーク日記(102)	
感銘歌 御津磯夫第十歌集	
歌集「スモン」	
佐助	
臘梅	
手作り	
折り鶴	
ここめ花	
如月の歌	
乙女の香り	
迷い心	
花の影	
発端丈山	
貝塚伊吹	
威風堂堂	
末の如月	
市民茶会	
花も譜も	
二の午	
アレツポ石鮫	
紅葉苔	
地図	
熟成	
伊賀上野(1)	
起震車	
一番星	
『いとよせ』	
私の一首	

今泉	由利	(1)
Blue Shoe		(2)
大須賀寿恵		(4)
岡本八千代		(5)
今泉	由利	(6)
弓谷	久子	(7)
青木	玉枝	(8)
内藤	志げ	(9)
林	伊佐子	(10)
安藤	和代	(11)
伊藤	忠男	(12)
足立	晴代	(13)
鈴木	孝雄	(14)
清澤	範子	(15)
森岡	陽子	(16)
近藤	映子	(17)
半田	うめ子	(18)
遠藤	脩子	(19)
富岡	和子	(20)
杉浦	恵美子	(21)
平松	裕子	(22)
小野	可南子	(23)
山口	千恵子	(24)
夏目	勝弘	(25)
阿部	淑子	(26)
白井	信昭	(27)
いーはとぶ		(28)
青木	玉枝	(30)

### 『俳句』

かさね吟行会 二月			
『酔いの徒然』(36)			
ある自然科学者の手記(35)			
絹の話(53)			
短歌に詠まれた茂吉			
楽しい時間(29)			
伊賀上野			
「水魚」のことから(171)			
『歴代天皇御製歌』(三十五)			
現代学生百人一首(二〇一四)			
ことのはスケッチ(436)			
編集室だより(二〇一五年二月)			
和菓子街道(102)			
お知らせ・編集三河便り・三河アララギ規定			
貫名海屋資料館	岡本八千代	夏目勝弘	山本紀久雄
小野可南子	鈴木孝雄	弓谷久子	松本周二
(1)	(2)	(4)	(5)
山元正規	今泉由利	川井素山	小柳千美子
(6)	(7)	(8)	(9)
森岡陽子	田中清秀	重野善恵	米田文彦
(10)	(11)	(12)	(13)
和田清信	和田勝信	小池清司	植村公女
(14)	(15)	(16)	(17)
丸山醉宵	大橋望彦	今泉雅勝	鮫島満
(18)	(19)	(20)	(21)
田中清秀	丸山醉宵	大橋望彦	今泉雅勝
(22)	(23)	(24)	(25)
山本紀久雄	夏目勝弘	山本紀久雄	山本紀久雄
(26)	(27)	(28)	(29)
貫名海屋資料館	岡本八千代	夏目勝弘	山本紀久雄
(30)	(31)	(32)	(33)
東洋大学	今泉由利	三河アララギ	平松温子
(34)	(35)	(36)	(37)
三河アララギ	平松温子		
(38)	(39)		
三河アララギ	平松温子		
(40)	(41)		
三河アララギ	平松温子		
(42)	(43)		
三河アララギ	平松温子		
(44)	(45)		
三河アララギ	平松温子		
(46)	(47)		
三河アララギ	平松温子		
(48)	(49)		
三河アララギ	平松温子		
(50)	(51)		
三河アララギ	平松温子		
(52)	(53)		
三河アララギ	平松温子		
(54)	(55)		
三河アララギ	平松温子		
(56)	(57)		

## 感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

流れ去る水のごときか一週の五日をわれの診察日として

P 1 6 3

あなじきこと繰りかへしつ々つ過ぐる日と夕べのうどん頼ましめたり

P 1 6 3

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

うつむけばスーツの脇の張り強し病み長かりしスモン癒ゆるか

ポケットに忘れてをりし珠数玉のつやつやとせる一握り出づ

両の掌にかこひてつけし線香の煙は東風に輪となりてゆく

侘<sup>ワビ</sup>  
助<sup>スケ</sup>

蒲郡 岡本八千代

人の名のごとき花の名侘助の一つにさはればわが手にほろり

侘助のちい小さきさい小さき花ざかりああ御津先生よりの花椿

御津先生手づから堀りてワビスケを友と我とに下されしかの日

それぞれに侘助もちて帰りたるかの日の君に急に逢ひたし

子規のこといつしかわれも「ノボさん」と言へてくるなり己の不思議

しょんぼりと庭石の平に腰かけて何も思はずたそがれ黄昏の中

春寒く暮れてゆくなりけふもまたわれの居場所ひとは一間の方丈

春の月おぼろに白くわれを照らす仰ぎて今夜はさびしくなりつつ

なにやかやと疎心うとこみの如くして猫ココにさへ餌を惜しみて

窓閉めて母屋へ帰る母屋には独りしづかに君がゐるかな

## 蠟梅

東京 今泉 由利

ひとつ花拾ひあげたりポケットにポケットよりか臘梅かほる

広き葉は落ち尽したり冬の木を満たす花々満ち満つかほり

三粒ほど朱実をつけし万両の今年の鉢に小鳥来たらず

臘梅の厚き匂ひに分け入りぬ冬のコートを匂はせ帰る

いにしえの貝殻塚のその上に棲みつつ私の貝殻加ふ

雪は降る雪は降る降る雪は降る九段通りにシャンソン聞こゆ

太陽と地球との距離調度良し午後の日溜り私の部屋

寝る前いねもう一度見るベランダに健やかなるかオリオン星座

ニユーヨーク零下十五度を知らせこし春近くしてまだ春でなし

ひよつとして氷河期かもしれないと暫く思ふ石の生い立ち

## 手作り

豊川 弓谷 久子

歌会へとはずみて通ひしこの坂を今日喘ぎつつ知事選に行く  
手作りにこだわるみさとが今頃は恵方巻き等巻きてをらむか

鬼祭りのたんきり飴が届きたり氏子でありし夫を憶ひぬ

亡き兄とゆかりの深き奉納歌舞伎田峰観音が載る今朝の新聞

兄の跡訪ねて行きし日もありき奉納歌舞伎の子等の写真よ

幾年も川面覆ひて茂りぬし萱刈られたり御津川清し

御津川のほとりに住みて御津山を仰ぎて過ぎし我が半生

この川にものを洗ひし日もありき螢を眺めし夜もありき

見かけより美味しかったと伝言せむみさとが呉れし手作りのチョコ

姉の忌明け済ませて野道を帰り来る何故か一人になりたくて



## 折鶴

新城 青木玉枝

山里は白き山並雪の山春待つ樹々よ私も待ちをり

年明けて寒の入り日の庭に立ち木枯しなき空青空の白き雲

足許の赤き椿を拾ひたり白きハンカチに包んで帰る

伊丹を出でこの山里に二年住む夜更けになると都会恋しき

独居の部屋は誰にも気がねなく折り鶴五十楽しみ作る

鶴ノレン作りて出入りの度毎にゆらゆらゆるる気を付けてネと

独居部屋は独りで楽しみ多くして好きなレコード編み物短歌

年老いて三食昼寝の明け暮れを謝しつつ安らに眠りの床に

年老いて日々学べる楽しさを一つづつ考へ残り世の道を

窓明けて弥生間近し庭の草昨日より今日へと緑が増して

## いごめ花

豊川 内藤 志げ

東の方より細く光りつつ雲は廣がり西の果てまで

細き雲ほぐれ帯なし伸びてゆく冬の青空しばし見上ぐる

教材と穂乃香の活けしこごめ花部屋の明るむ今日は立春

次々に太陽隠す雲速しそのたまゆらの日の射す窓に

接待の五平餅の添えものに今年も漬けたり白白一桶

ハウスカー押せば軽がる歩めるよわが友<sup>みたり</sup>三人も同じを注文

これほどに群なす鳥か鶉めキャベツの畑の緑を隠す

坐り葉の大きく廣がるたんぽぽに一つ咲き初む温き雨水に

しばらくをわれの歩みの前をゆくホオジロは櫛に小さく止る

椿より出でし目白は葉に止るわれとしばらく向合にけり

## 如月の歌

岡崎 林 伊 佐 子

ほほづきの朱よりもなほ赫々と燃ゆる没日畑を照らす

農仕事を終へて農具を洗ふとき日脚も延びて明るき夕暮れ

飽食を思ひ新たに試作する春の野菜の種を選びぬ

きさらぎの寒波に畑の蒲公英の丈低く咲く二株三株

春耕にわが背後に付く紋鷄われには見えぬ地虫を索るさが

母の顔うすれたれども幼な日の芋粥すすりし戦後をしのぶ

筆跡は在りし日のまま亡き父母の形見となりし日記の保存

いつまでもあると思ふな親と金母の遺言今も忘れぬ

子や孫に労はれながら同居するわが幸おもふ日々の暮らしに

裏山に杉の花粉が飛散する去年より多く野良着に付きぬ

## 乙女の香り

豊川 安藤 和代

目白にと半切みかん枝に差せば鶉素早く食べ散らしゆく

孫娘の横通る時ほんわりと乙女の香りに嬉しくなりぬ

孫揃うバアチャン喫茶のモーニングワインナー一本おまけがつけり

菜の花を髪に飾れば可愛いと孫に言われて満更でもなし

きつねの嫁入り本宮山上虹の見え孫の喚声響き渡れり

この先に明るい希望のある如く大き虹見ゆ心躍らす

セーターの赤を着せれば医師からも若いと言われ夫は胸張る

サッカーの優勝ルンルンユニホーム見せつつ外孫は熱弁ふるう

野を行けば六体地蔵に陽の射してやさしお顔に手を合せたり

風なきに山茶花の花片ハラリ散るその一瞬に息止めてをり

## 迷い心

大阪 伊藤忠男

朝日浴びまだらに光る屋根瓦昇る竜神勢い余る

冬過ぎては花の色香に迷いけりときめく心なほときめかし

霧雨に濡れて春呼ぶ宇治の街何も語らず歩き続ける

春来ても喜び半ばいずれとて黄砂に花粉悩みの種に

冬ならと厚着で歩く京都道春の陽気に汗を拭き拭き

凍りつく寒さに耐えてフキノトウ春は間近と我に告げてる

同窓の集い賑やか気兼ねなく夢語れるはこの時るとき

鬼は外福は内なり我が棲みか山の神いる幸せな家

何があればあつてはならぬ戦争あらしいは心蝕み人忘れさす

幸せを呼ぶか今年は西南西ほうばりながらただただ祈る

# 花の影

東京 足立晴代

舞う雪や庭に白々水仙しろしろの眞中まなかに黄きいの丸まるき輪わ見ゆる

春浅く白き水仙並び咲き頭こうべを垂たれて謙虚けんきよなり

北風むかに向いて急ぐ家路なり防寒体制完備せる吾

白梅こぞの去年と同じく咲きし庭変らず眞見まみえし吾幸なり

移り住み走馬燈の如く時去りて迎えし春に早咲きの梅

雪深ふかく埋もれし村人むらひとびと々の如何おわに在すか念ずる日々なり

春よいの宵雛かんはせの顔ほんのりと雪洞ぼんぼり淡く花の影

夫婦めおとびな雛すわ仲睦まじく座り居て蓄もほろこぶひな祭りかな

雛々の居い並ぶ前ならでかるやかに袖ひるがえし舞うよろこびは

雛祭桃の小枝をかざし舞う若き日偲び今幸なり

## 発端丈山

沼津 鈴木孝雄

山裾のみかん畑にメジロ一羽枝から枝へと渡り楽しむ

発端丈山より見る富士山は箱庭だ海島山の織りなす極美

快晴に急ぎ登りし発端丈山ただただ見とれぬ富士山絶景

幹まわり数本打たれた薬剤瓶沼津御用邸記念公園の松痛々し

西附属邸跡のささやか梅園塩害で壊滅すれど花再生す

「藤牡丹」八重の花弁の梅の花紅華やかに香り醸しぬ

寒霜で枯れてしまったチャイブの葉春の風受け芽が顔を出す

静浦の港に浮かぶクラゲの群れ海の異常を告げる使者か

雪予想はずれて都民は肩すかし気象予報士またも言い訳

風邪長引き大事を取って医者に行く待つはマスクの老人ばかり

貝塚伊吹

春日井 清澤 範子

貝塚伊吹の枝先ゆるる風寒しストーブ赤あか雨水の日なる

幾回も履歴書送るも返さるる娘の心思ひて吾涙ぐむ

増築の武者隠し付く室に赤きジュータン敷きて客を待つ

出窓より朝陽は深く差し込みて暖かきかな客待つ今日は

武者隠し付くる室には出窓あり冬晴れの日の明るかりけり

床の間に父彫りましし寿老人置きて来客待ちる今日は

庭椿は赤白混じりの花咲かせわが家の春の雰囲気漂よふ

朝食の仕度は吾と娘と手分けして八十三歳の夫にそつとお休み

たつぷりの湯にてゆでたりササゲ豆信州の味たつぷり戴く

低気圧高気圧と天気予報士は雨水の日にも雪だるまと風



## 威風堂堂

東京 森岡陽子

枝枝に梅の蕾と雨粒が日射しの中で並んでキラリ

生き生きと三百年の歴史持つ松の姿や威風堂堂

雪吊りと菰に守られ松や梅江戸の庭園ビルに囲まる

海水の魚棲息唯一と潮入りの池浜離宮なる

高速道カーブを過ぎる目の前に真白き富士に朝日輝やく

冬空に上弦の月出でし時寒さ気にせぬ野猫遊ぶ

都会の子残雪よりもどろ遊びそれでも楽しと団子に丸め

節分に愛犬逝きて鬼恨む明るい春が明日は来るやふ

亡き犬が深大寺へ向う時紅梅一輪何故か開きぬ

空は青緑の皇居望む館源氏平家の物語絵を

## 未の如月

名古屋 近藤 映子

見降しの桜並木の芽ぶきの気配後一ヶ月余りの待遠し

別名と「かがり火草」の名を持ちてシクラメンの赤は我が家を照らす

わが手足自由にならねど命有りて夫の一回忌を迎へたり

孫「麗美」は一年経て歩き出し西明寺の本堂を歩き廻りぬ

杖付きてゆつくり歩く吾の手を息子は持ちて墓参り

ママ、パパ、とバアと発する麗美の声この八階に響きたり

孫の手をつなぎて歩く吾の足丁度いいと子に言われ

診察日僕の手握つてと医師の手を持つ吾ドキドキしたり

しっかりとドクターの手を握れもせず手感覚わずかに

如月はつらつら思うに寒い月自然も心も寒い月

## 市民茶会

新城 半田うめ子

新城の市民茶会楽しみて頂きたりし文化会館にて

自転車にて転びたりし日早くのれけがも無くして消防車の来たり

三ヶ日の咲夢茶屋にて昼食の味のよくして楽しみたりき

新城に悪人ゐるとの逮捕するさわがしきあり平成元年

今日も又竹生神社の近くにて数多の舞ひてゐる鳥の見ゆ

さらさらと西川の水美しく小魚のゐるなり楽しみ眺むる

頂きし受胎調節の証書なり愛知県部長指導員より

東の杉林の無くなりて淋しかりからすの住居無くなりたり

## 花も蕾も

蒲郡 遠藤脩子

突然の二・三十羽の椋鳥に花も蕾みも食ひ尽されぬ

見頃との報道のあり無惨やな我がソシンラウバイ裸木となる

いつになく見事な黄葉を楽しみて花を香りをと我待ちにしを

寒アヤメ咲きましたよと電話ありわが花友達がまたふえました

崖上の森より聞ゆる梟の鳴き声か細し寒さ著き夜半

逃れきたか捨てられたるか耳黒き二羽の子兎我を見上ぐる

一頻り庭を駆け回り連れ立ちて知らぬ間に消ゆ二羽の子兎

陽を求め乗り出すように生ふこの木越し来て二十二年共に生き来し

庭隅に白き蕾を見せしより如月ひと月花開くなし

十二月の挿し木に耐へて緑濃き葉を繁らするマーガレット三本

二にの午のうま

東京 富岡 和子

戸袋で夕餉の音おきこえくる春待つ今宵十三夜月

降雪のニユース立春冬の空白玉椿とおぼろ月夜と

春あらし樽に氷を残し往き青空青く透してみゆる

坂道の白い水仙すき通り伽藍の山気からだに充ちて

春寒く蕾のしづく利久梅待ち遠しくて円まるみ観察

高台の春の陽うける赤鳥居お稲荷いなり様の初午はつうまですよ

二にの午のうまの祭典参加御神酒おみきうく婦人ら赤み繁栄祈願

春よき日ふわつと目方乳の香うけ男おのこの子赤ちゃん懐きて幸を

うすく濃く咲きそろう桃弥生月現代雛は寄り添い笑みて

菜の花色の夷隅いすみ鉄道バスの旅ムーミン谷も山にはお城

## アレツポ石鹼

蒲郡 杉浦恵美子

アレツポの石鹼かれこれ十年來我が浴室に常備してあり

黄土色無骨な四角アレツポの石鹼砂漠を連想させる

痛ましき事件は遠く我が前のアレツポ石鹼眺むるばかり

痛ましき事件語らふ夫もなく底冷え涯なき夜を過し居り

痛ましき事件ありても時止まず今朝立春の日をを浴びている

世の動き我には遠い筈なれどこの冬空の雲の厚さよ

独り旅も悪くないけど友と居てお喋り弾むわたしもあるのだ

幼少期の宮沢賢治も泊りたる大沢温泉露天湯渾渾

今日辺り雪のピークと土地の人湯船の外は烈しく吹雪く

ああこんな旅思ってた古宿の炬燵に凭れてスルメしゃぶって

紅菜苔こうたいさい

豊川 平松 裕子

我が為にと半分までも残しくるその心持ちを抱きて帰る

輪郭にも色にも一点の乱れなく朱しゆに燃ゆる陽は海に沈みゆく

売れぬことを喜びてをり今日の我帰りゆく客に頭下げをり

季のもの紅菜苔こうたいさいの紫の茎は煮え湯に緑に変はる

黄の花の蕾の見ゆる紅采苔季節のものに心足らへり

土にこぼれし種より生ひて育ちたるクリスマスローズは秩序なく咲く

吾が鉢より分けし一株の生き続くマユハケオモトは君が庭隅

土手を削る勢ひひそめ沢は今日岩間を浅く澄みて流るる

真夜に夫の聞きぬし音は枯れ竹の沢に倒るる音と知りたり

倒れるる太き真竹を踏み砕く二月なれども汗にじみ来ぬ

## 地 図

豊川 小野可南子

家籠る日々にもひとつ嬉しきはおほき花豆ふくら煮上ぐ

たよりなき己が歩みの影みつつ菜花なばな摘まむのひたぶる思ひ

久々に来たれるスーパ一のところ夫の好みのジャコの釜あげ

宅配の受取りサインをしたと言ふ大人になったと佑真の実感

方尺の鉢に溢るる小さき芽一寸あやめの尖れるみどり

朝の日の明明あかあかあかるくさすところ春の芽吹きを指にふれつつ

奈良の地図京都の地図を広げつつ過ぎにしかの日を指に辿りぬ

寒いとて家に籠れる我なれば地図と遊びぬ時を忘れて

一休寺の小さき文字に行き着きぬ又春の日の目的とせむ

落椿ひとつ拾ひてそつと置く母なるその木のその根に近く



## 熟成

豊川 山口千恵子

一年をかけて熟成する味噌の瓶を置きたり北の部屋隅

物音のせざる夜更けに目覚めつつわが耳奥に虫鳴く如き音

はや臺の立ち始めたる小松菜を雨の上がれる畑にとりゐる

冬の日の温かき畑にかがみつつ抜きたる葱の枯れ葉をとりぬ

赤々と房美一ヶ月保ちつつ南天一枚玄関にあり

ふさわしと思へる人の名をメモし村の役員の選挙に行きぬ

夕光をまともに受けて歩きゆくコンビニまでの二百メートル

北京より鮮やかな声の電話ありリック背負ひて旅してゐると

一片を四十グラムに切り分けて昨日植ゑたりジャガ芋一列

一つづつ畝うねに並べて土を掛ける春には一畝芽出で揃はむ

## 伊賀上野(1)

豊川 夏 日勝 弘

浅春の光りをあまねく取り込まむと南に向きて庭の梅さく

待ちてゐし月ヶ瀬ゆきを明日とせむ三割引きのジャパンキップ

真夜中に目覚めて闇にめぐらす多し窓を鳴せし風のやみをり

いと小さき関西線の気動車の騒音のなかにて一時間余り

月ヶ瀬の梅はまだまだ蕾とぞそれでも行かんとタクシー乗り場へ

タクシーで月ヶ瀬までは五千円今日の往復キップより高い

梅はまたと芭蕉に会ひにと記念館へ木立に暗し城山のはる

三百円払へば芭蕉に会へるなり玄関の奥に偉大な芭蕉像

芭蕉より忍者が主なり佐賀上野なにとはなしに忍者屋敷へ

現はれし忍者の一団は中国人く的一声甲高く響く

## 起震車

横浜 阿部 淑子

花店より愛で選めび来こし花々を花器に挿しつつつ歓迎のことば

三万余の東京マラソン参加者は全員完走無事故に安堵

起震車にて六強の揺れ体感し支えし腕は翌よ日も痛みぬ

今日は冬明日は夏なつびと急変の気温に対応懸命の日々

春近くさし込む光り鋭くて地球の気候は危機に迫りつ

## 一番星

豊川 白井 信昭

碑は語る海苔養殖発祥の地豊穰の海と我は今に知る

山里の林道に聞く篋の竹と竹とが擦れ合う音を

夕焼けの潮入の浜巡れるをふれあい橋に一番星を

これでよしと見回り了えて頂に雪の富士山見て下る

東三河に春を呼ぶという鬼祭今日この朝明霜あさけしるき道

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

ベランダに蜂の亡骸二つあり還りしものに小春日やさし  
血圧の高きわが母の入浴に幾度もゆく湯音確かめに

稲吉友江

木枯吹く校庭の隅の桜の枝ほのふくらめるつぼみは幾つ  
千歳へとわれらのバスはひた走り峠超え行く雪は降る降る

鈴木美耶子

雪降りて銀世界のわが庭の中遊ぶよ幼と我らの正月  
神具店の翁と交はす遣り取りに譲らず引かずの豊川稲荷

吉見幸子

坪庭の椎の木むらに日の射し来ひこばえ萌ゆる梢のさびし  
ときどきに体力かけるや師の姿それをもわれはあくがれてゆく

牧原正枝

正月にみなみな集まり高校生の一ひとは宿題たくさん持ちて  
久しぶりに遊びの誘ひの電話あり段取りよくも家事はそこそこに

岩瀬信子

屋敷の上雪ぶとんかけし家々よわが乗る列車は西へ西へと  
旅人のゆきかふ駅よ出口をば探して歩む吾も旅人

石田 文子

久々に三人の吾子今宵集ひ心うちとけ穏やかにして  
特別の事多かりし十年日記書きやらむとして余白を探す

森 厚子

新しき年を迎へしこの夜空花火のひかり冴え冴えとして

ロウバイの葉を吹き落す今日の風黄のかたまりの花いろあざやか

山崎 俊子

せきしゆく  
関宿のひかげに残るよべの雪素手に掬ひて孫ははしゃげり  
紅き花の絵蠟燭をば買ひきたり今宵も灯すそのほのあかり

三田美奈子

クリスマス今年は何度もやって来る孫は七度もありと覚ゆらし  
三河湾に鴨ら次々渡りくる遅れる四羽よ追ひつけ無事に

水野 絹子

テレビよりの除夜の鐘聞くわが耳にはや初詣の人の足音

形原の稲荷様への初詣おでんの湯気がそこここにただよふ

牧原 規恵

## 私の一首

冬去ればこの山里にも春うらら春告鳥の声をきく朝

青木玉枝

山里に二年目の冬を迎へそぞろ都会恋しき朝霜柱の草をふみ手をかざしあの山並みの向ふに故里蒲郡の海を思ひ涙がホロリと出た瞬間きれいな春告鳥の声に都会ではきけない声空気のおいしい事しみぐ山里に春の訪れを感じ空気のおいしさをしみぐ感じました。帰りに集団生活を始めて田舎の人の大声に驚きました何れ帰るつもりです。

伎芸天に先ずは拝さむ境内に敷きつめられし小砂利踏みゆく

小野可南子

奈良秋篠寺は千三百年の勅願寺である。伎芸天は天衣の美しい自在天女、私は三度目の参拝である。恋する人に会えるような思いで急ぎ山門をくぐった。参道に敷きつめられた小砂利は、私が見たこともない細く美しいもので、私は逸る<sup>はは</sup>気持を鎮めるよう感覚、そつとそつと歩を進めました。

今まで共に短歌を学んで、共に伎芸天を拝した二人の方のまほろしと、今一緒にいるような、そんな思いの伎芸天への詣り路でした。

## 夕陽受け百尺の影従えて冬の散歩はガリバー気分

鈴木孝雄

晴れの夕方、近くの静浦港を散歩し、空き地を歩いていると、西の空に太陽が沈みかかる。体に夕陽が当たって、東側に影が長く伸び、まさに自分が巨人になったような錯覚を覚える。影がずっと自分を離れずに付いてくるさまを、子供の頃読んだガリバー旅行記の主人公を連想しながら読んだ。

冬も健康維持のため、特別な用事がない限り夕方の散歩を欠かさないよう務めている。寒中の散歩もまた楽しからずや。

## 車中より姉が小さく手をふりぬ見送る我に手をふりて行く

弓谷久子

一月五日を姉が突然なくなりました。ショートステイ先からものはぬ身となって帰ってきました。車椅子のまま車に乗せられ行く姉がそれでも見送る私には小さく手をふった姿が今も目に残って忘れる事が出来ません。

親よりも深いえにしの姉でした。九十六歳まで生きて年に不足は無いけれど何か心が空しくてやはり淋しい心でいっぱいです。

『俳句』

春立つやライン真白き競技場

松本周二

笹鳴きや妻の歩みのおぼつかな

ものの芽の日輪指して射るごとし

猫柳うぶ毛に風の湿りかな

山元正規

誰彼も残る寒さを言ひにけり

みすずかる信濃の空や初つばめ

光とふ素粒子集め日向ぼこ

今泉由利

シャンソンといふシャンソンや春近し

太陽の光集むる福寿草



冴返るはやばや畳む露天商

川井素山

段丘の菜の花の帯海へ伸ぶ

墨堤に色づく万蕾つばくらめ

草青むいつもの猫の通ひ路

小柳千美子

爆音のこもる中空冴返る

束に積む無人売場の蒺藜草

残り飯ふくら雀に撒く朝

重野善恵

寒月に肩を窄むる家路かな

立ち寄りし寺院に梅の二三輪

白波に岩浮き沈む春の湖

田中清秀

枯れ枝を影絵にしたる日暮かな

高層のビルを取り込む春の空

月冴ゆる遠く近くの靴の音

森岡陽子

雪降るや白川郷の国際化

雪うさぎ南天の眼のゆるみそむ

トランプのひとり遊びに春を待つ

米田文彦

愚痴まじる茶飲み話しや春隣

釈迦堂の屋根の黒さや冴返る

初松籟枝の間に金鼓見ゆ

和田勝信

相輪の宝珠かがやく初御空

三日には動く無人のモノレール

賄ひの菜一つ増え春灯

小池清司

足裏に土やはらかし露の臺

向き合ひて語ること無し春炬燵

春泥や言い訳いよよ深まりし

植村公女

苔寺の苔灯しをり冬紅葉

存在のほのかな重み花八ッ手

# かさね吟行会

## 「小金井公園」 二月

田 中 清 秀

名勝「小金井桜」は曾ては玉川上水の両側の桜並木の

ことをいい毎年多くの観桜客で賑わい、明治天皇をはじめ皇族の方々も訪れたという。この観桜客のために大正十三年武蔵境駅と国分寺駅の間に桜のシーズンだけ仮の乗降場ができた。現在の武蔵小金井の駅である。その桜

並木もすっかり衰えてかつての面影は消え、代わって昭和二十九年玉川上水の目の前に小金井公園が開園、桜をはじめ多くの樹木が植えられた。現在は桜の名所の位は完全に小金井公園に移っている。平成二十七年二月二十四日、かさね吟行会はこの小金井公園で開催された。参加者は松本周二、川井素山、山元正規、柳田皓一、今泉由利、森岡陽子、小柳千美子、山迫京子と筆者の九名である。

小金井公園の西側には小金井街道が、南側に五日市街道が通り、公園北に隣接して小金井カントリー倶楽部が広がっている。面積約八十八ヘクタールの広大な敷地には

千七百本余の桜が植えられている。残念ながらまだ桜は咲いておらず今回は梅見である。梅園には約百本の梅がすでに七分咲き紅梅、白梅、枝垂れ梅があり小鳥が枝を鳴き渡り周辺に梅の香が仄かに漂っている。この日は平日でうす曇りにもかかわらず見物の客はそこ此処に見受けられ、散策する老夫婦の姿も多く見られた。

老夫婦何も語らず梅見かな  
蠟梅の香に誘はれし一羽かな

皓 一  
千美子

広い園内には蠟梅の花がまだ咲き残り芳しい香りを漂わせている。その黄色い花弁は蠟細工のように半透明で光沢があり、十七世紀頃に中国からもたらされ観賞された。これからは梅に続き桜は勿論のこと、ツツジ、ハナミズキ、フジ、アジサイなど多彩な花々が咲きそろい多くの花見客の目を楽しませることであろう。公園の規模は都立公園の中でも最大級である。

春禽の花弁こぼし翔ちにけり  
下萌の土黒々ともぐら塚

正 規  
京 子

もぐらは地中にトンネルを掘りミミズや昆虫の幼虫を食べるなんとユーモラスな動物である。ただ、田畑を荒らすので農民からは嫌われもぐら打ちで追い払われる運命にある。木立の下には黒い土を盛り上げたもぐら塚がいくつも見られた。また、中央広場では鳩や野鳥が新しく芽生えた若草を啄ばむ姿が見られ、二月末であるがすっかり春めいた様相を呈している。

蜜を吸ふ小鳥に揺るる梅の花

素山

若草に嘴よこす鳩の群

清秀

園内には「江戸東京たても園」が併設されており豪商の邸宅や古い農家、さらに洋館など歴史的建造物が幾棟も保存されている。その中に二・二六事件の現場となった高橋は清の住まいがあり本人が銃殺された寝室と書斎が残されている。その資料館もあり八十年近く前の動乱が昨日のここのようによみがえる。

安政の豪農の庭野蒜生ふ

周二

花芯にはすでに青き実梅の園

由利

はけの水流るる先の花馬酔木

陽子

商店を改装した二階にはうどん屋があり皆揃って昼食となった。肌寒い気候にはやはり暖かいうどんが心地よい。見残した建物をそぞろ歩きで巡りながら、いよいよ囁目五句の推敲に入る。本日の句会は公園近くの喫茶店で行なわれた。定休日にかかわらず我々の為に貸切り営業で協力頂いた。ジャズのBGMを聞きながらの句会も楽しい企画である。いつもより秀作が揃ったのはそのせいであろう。最後に打ち上げの杯を挙げて散会となった。

■かさね吟行会■

日時 四月十日(金)

場所 上野動物園

集合 上野公園園口十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

## 『酔いの徒然』（三十六）

丸山 酔宵子

### 『東京シューシャインボーイズ』

暁テル子が歌う『東京シューシャインボーイ』が一世を風靡したのは、朝鮮動乱で戦後の復興が加速されていた昭和20年代の後半である。

サーサ皆さん 東京名物

とつてもシツクな靴みがき

鳥打ち帽子に胸当てズボンの

「東京シューシャインボーイ」

特需に沸く東京の繁華街には、靴磨きが出て、羽振り  
のよさそうなお客や駐留軍の兵士に盛んに声をかけてい

た。しかし、高度成長とともにその数は減ってきて、  
今では銀座でもあまり見かけなくなってしまったが、15  
年ほど前から有楽町駅前のガード下で細々と開いていた  
靴磨きがあった。「千葉スペシャル」と言つて、特別調  
合の靴墨で何度も丁寧な磨くと「アンビリーバブル」  
見違えるほどの光沢が出るのである。しかし値段は通常  
の紳士用短靴では1000円と、やはり高めに設定して  
いるが、その技術の高さから、常連客も多く、その数は  
50000〜60000人とも・・・。

しかし、有楽町近隣の再開発により閉店へと追い込ま  
れ、しばらくは「郵送」で靴磨きに対応していたのだそ  
うだが、有力なファンである企業経営者が、有楽町交通  
会館と話をまとめ、晴れて靴磨き業を復活させたのであ  
る。同時に商業施設装飾大手の乃村工藝社とファッショ  
ンのユニテッドアローズがスポンサーにつき、小洒落  
たイスやユニフォームが支給されることとなったのだ。

そして最終的には弟子数人を含めて靴磨き集団「千葉スペシヤル」として活動再開となったのである。

ビジネス現役バリバリの頃から、ここは勝負と言うときは、ダークスーツの勝負服とともに、ガード下の千葉スペシヤルに来て、靴をピカピカにして「ヨッシャー！」と出かけたものだ。外は粉雪がちらほら、ネオンがともり始める夕刻、今宵は帝国ホテルでパーティー。交通会館玄関ホール横に、ウツデイーな特製椅子席が4席、特製用具箱がそれぞれ横におかれている。お揃いのお洒落な蝶ネクタイにハンチング帽（鳥打ち帽子）。師匠である千葉さんとその弟子たちがひたむきに靴磨きに没頭している。

「・・・どうして靴磨きに？ 脱サラ？」「ええ・・・」

靴磨きに興味があつて、インターネットで探したら、千葉スペシヤルに出会い、即座に弟子入りをお願いしました・・・」「矢張り千葉スペシヤルは凄いね・・・。さあ

これからパーティーだ。シャンパンにキャビア・・・今夜はいいことあるかな・・・」

○銀座の灯（ひ）

粉雪（こゆき）はじけて靴光る

○木枯らしが

足もと抜けて光る靴

酔宵子

## ある自然科学者の手記 (35) 大橋望彦

### 「田名部のどん底生活」

十月の初め、私共の割り当てられた鳥沢村を目指して、田名部を出発致しました。凡そ二十丁ばかり参りますと、突然祖母が馬より落ち、腰をしたたか打って、起き上がる事ができません。前途は遠いし、老人の事、已む無く田名部の宿に戻り、色々手当てを加えましたが、どうも思わしくなく、遂にそれが原因で中氣と成って仕舞いました。

この菱千に二十日余りも逗留し病人の治療や家内五人の宿料等中々に嵩みます。貯えも残り少なに成りましたので、成るべく安く、木賃泊まりにして貰い、出来るだけ節約を計りました。

その時入西という方が御同情下さって、『丁度自分の出入りの者の家が一軒空いて居る筈、手狭だが其処へ引き移られた方が旅館より幾分お得でしょう』と、御親切にお勧め下さいましたので一ヶ月式朱の家賃で借り、鳥沢村へ行くのを止め、此処に当分居住する事に成ったので御座います。

然し、家とは名のみで、八畳位の一間に揚戸が有るばかり、其の八畳も畳が無く、障子も襖も御在りません。壁も落ち、

屋根も雨の漏るに任せ、誠に酷いあばら家には驚きました。入西様から畳を三枚拝借し、家内五人が、この三畳の上に寝起きするのです。病人の祖母に一畳割きますと、四人で二畳しか使えません。その時は旧十一月、日本の北の果て、南部の寒さは亦一入で御座います。月漏るるあばら屋では、寒風も吹雪も吹きこみます。

然し若い者は、互いに励まし合い、どうにか暮らしました。病、病人の老祖母には、余程寒さが触つたものと見え、病勢つるばかり。遂にこの家へ移りまして九日目、同じ月の十七日に、七十余歳を一期として故郷を遠く離れた南部のあばら屋で、淋しく哀れにも、逝去されたので御座います。

西も東も判らぬ土地での不幸、一同途方に暮れましたが、ご近所の方々が参られ、葬儀万端色々とお世話下さいました。この辺りでは棺屋も穴堀りもなく、只五人組が世話をする風習だそうで、近所の者が集まって棺を造る、葬物、お供えをする……寺は円道寺とか申し、此処で型ばかりの葬式を済ませ、遺体も其の寺へ埋葬致しました。世が世なら、二百五十石取りの軍事奉行の御後室様として手厚い葬儀も出来るものと、亦一同涙の種で御座います。然し、戒名丈は、『靈寿院殿実室妙翁大姉』と、立派に付けられました。

葬式の費用、手伝いの手間等、何ほどかと、世話して下さいました方へ尋ねますと、棺代が式両二分、その他色々の費用を併



せて、五両掛かったと申します。今の身分では、余りに法外だと思いましたが、今更文句も言えずに、泣き寝入りをする他ありません。其の時は最早蓄えとてすっかり無くなりましたので、戦争の時着て出た衣服を売り払って、やっと支払いを済ませました。

十日ばかり経つと、隣家の亭主が又もや棺代二両二分頂戴したいと言い出したので、この間支払った筈だと答えますと、『受取書を見せろ』と、若い女ばかりと侮って、二重取りをしようと企んだのです。知り人はなし、女ばかり、騙されるとは知りながら、受取書を取って無かったのが、此方の落ち度で、如何様にも仕様が御座いませんでした。同藩の葉賀様と言う方から拝借して、その場は済ませましたが、悔しくて悔しくて堪りませんでした。段々後から聞きますと近所でも相手にする者も無い無頼漢であつたそうで御座います。

病足に腫れ足とか申します。此の頃から上より下さる御扶持が亦減らされました。一人当たり一日黒米で三合、他に何にも渡らなくなりました。其の米も南京米で、食べられたものでは御座いませぬ。其の御飯丈でも、そのまま食べては成らないのです。戴く黒米の半分は、蓄えて不時の容易にし、半分の米へ昆布を切つて混ぜ、粥にして食べるのですから、お腹が餓ひじて堪りませぬ。『どんな辛い思いをしても好いから、御飯丈は十分食べて見たい』と、我俣を申て母に大変

叱られた事が御座いました。其の糧に入れる昆布は買うのはありません。毎朝、人の起きぬ前に、海岸へ出て、流れているのを採るので御座います。

その後の艱難辛苦の数々、口にも筆にも尽くされませぬ。母は針仕事を致したいと処々へ頼みに回りましたが、見知らずの他国者と相手にする人も無く、況して寒村の事ですから、賃仕事も見当たりませぬ。それでも食わずに入られませぬから、一年ばかりは、近辺の山林へ、柴枯れ枝等を集めに参り、之を束ねて、売り歩き、僅かながら凌ぎの足しに致した事も御座います。亦、菓子屋へ頼まれて、菓子粉引きを内職にするなど、色々苦心を致しましたが、食べる丈でも、女の子では困難で御座います。

氣丈な母のことですから、少し位荒仕事は厭いませぬが、元々南部の斗南地方は恐山下の火山灰の不毛の土地、一粒の米も出来ませぬ。従つて、住人も少ない訳で御座います。母も伯母と額を集めて、とつおいつ、過ごし方を思い、行く末を考えますと、『こんなどん底生活に落ち、何時浮かぶ瀬があるのかわから……こんな辛い思いをするよりは、一層の事、家内一緒に深瀬に落ちて死ぬ方がましだ、それも離れ離れにならぬ様、帯で結び合つて』等と、泣く泣く相談した事も御座いました。

## 絹の話 (53) 「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

### 日本の絹織物と染色あけぼの

#### 【絹織物の渡来と染色】

日本には絹がいつ、何処から、どこを經由して伝来したのか明らかではありません。先史時代からヤマ繭などの蛹を食べた副産物として野蚕の紬糸が必然的に採れたのかも知れませんが定かではありません。先住民のアイヌにも絹の歴史はない様です。定説では4500年位前、黄の国の皇帝の妃が柞蚕（中国北東部産の野蚕）繭を湯の中に誤って落とした所、茹だった繭から糸が採れたと言われています。

弥生時代の先進文化を出雲地方に伝えた大国主命が肩に背負っているサンタクロースの様な大きな袋の中に稲作文化と一緒に、紬的手法の絹織物文化も入っていたのかも知れません。大国主命は白い衣服ですが、袋の中には稚拙ではありますが染めの技法も入っていたと思えます。あるいは漢の時代の出先機関のあった楽浪郡から渡来する技術集団の中に絹技術集団もあったと思えます。

（因幡の白兔の神話?...大黒様は蒲の穂の綿で兔を癒す）  
日本の絹に関する明らかな史実は、邪馬台国の卑弥呼

が魏の国に朝貢するにあたり、精一杯の絹織物「倭錦（ワキン）」「雑錦（ザッキン）」を持参したと魏志倭人伝に記されています。錦と云っても二、三の色糸が織り込まれた縞の格子または幾何学的文様で厚手の織物であった様です。厚手というのは恐らく手紬糸で織られた物で、生糸を挽（ヒ）いて薄物を作る技術がなかった事を意味しています。魏の王からは精巧な経錦（タテニシキ）と沢山の白布を賜って来たと言うので、邪馬台国の位置する所は中国の生糸絹文化が直接伝わる先進地域ではなかったとも思われます。

以来日本では古墳時代から飛鳥、奈良時代にかけて強力な国家体制確立と共に絹織物、染色が素晴らしい発展を遂げて行くのです。

#### 【絹文化の積極移入】

大和に強力な国家が出現すると中国へ度々朝貢する様になりました。『新撰姓氏録』（シンセンシヨウジロク）によれば、仁徳天皇の時、新羅から殖産氏族とも云うべき、農業、土木、鉦山、養蚕等に優れた大集団「秦氏」が渡来し、天皇は彼らを各地に分散配置して、諸国に先進産業を起こさせました。

雄略天皇の時代になると各事業が発展し、軟らかい絹織物も沢山献納されるようになり、天皇は献納された艶

やかで軟らかく、温かい絹を大いに悦び、秦氏に「禹都万佐（ウズマサ）」の称号と京都の西に土地を与えた、と記されています。また応神天皇の時代には呉の国から大勢の織り、縫工などの加工職人集団を来朝させています。（呉服Ⅱ和服の原型が出来る？）同時期に蓼藍、紅花等や紫根染め等の多様な染色技法も伝わって来たようです。

### 【染色技術と冠位十二階】

女帝推古天皇は聖徳太子を摂政として強力な国家体制を築く為、政務に当たる役人に冠位十二階の制度を定め、冠と衣服の色を位によって決めました。

この様な事が可能になった事は、とりもなおさず、絹とその染織が輸入に頼らず、自前で大量に、しかも権威の象徴として輸入物と遜色ない高度な域に達したから出来た事でしょう。

それを可能にしたのは大和、河内、近江などに置かれた渡来人の子孫の錦部（魏又は蜀の国から渡来）、綾部（蜀の国からの渡来？）、呉服部（クレハトリベ、呉の国からの渡来）等のそれぞれ異なる技を持った技術集団の存在があったからと思われまます。それ等の数々の宝物や染織物は洋の東西からもたらされた蜀江錦や太子間道（西域トルキスタン？ウズベキスタン？製）等と一緒に法隆

寺に保存されています。この時代の染織物の最高峰として現存する、羅織に刺繍した天寿国繡帳（国宝、聖徳太子の妃、橘大郎女（タチバナノオオイラツメの）命による）が自国で製作出来ている事から推察しても、日本の染織の技が大陸の技術に勝るとも劣らない高度に達していた事を裏付けています。

### 【奈良の大仏開眼供養】

奈良時代になると東大寺が建立され、聖武天皇の詔により盧遮那仏が造顯され、その開眼供養には聖武上皇、光明皇后、孝謙天皇をはじめ、天竺や中国から招いた導師、各国の僧侶など二万人もの参列者があつたと伝えられています。

参道の色とりどりの原色豊かな幡や艶やかな参列者の衣装の多くを国内で調達出来る様に成長しており、名実共に日本がシルクロードの終着駅として東西文化交流の仲間入りを果たしたアピールでも有りました。

この時の儀式に使われた諸法具や聖武天皇の遺愛の十数万点に及ぶ膨大な品々が納められたのが東大寺の「正倉」です。主だった絹織物に経錦、緯錦、綾、振織、綴織、染め物は夾纈、縹纈、纈纈、摺絵、他に刺繍、編、組等が有ります。

### 短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 四十三回

「月虹」 鮫島 満

### 二十二 板垣家子夫 3

前号終盤以降の歌は大石田を去ってからの茂吉を憶うものである。

この春はわれのみ来る下河原窪きに残る雪をば踏み  
 て 君在まさぬ今年の春の寂しきを河原の芝生萌えいでむ  
 とす  
 あたたかき春日を避けて憩はれし沼べの杉すげ生新芽ふ  
 きつつ  
 この原に翁草をば尋ねにき花の過ぎしを二人知らず  
 して

前年十一月に茂吉を東京に送り届けた板垣は寂しい春を迎えている。一首目の下河原は最上川が大石田町の西北端で迂曲するところにある河原で中に小さな沼を抱えている。大石田時代に茂吉はここを好んで散策し、『白

き山』には「最上川下河原」一連十一首を残した。「最上川の大きながれのしもがはら下河原かゆきかくゆきわれは思はな」「やまひ癒えてわが歩み来しこの原に野萩のはぎの花も散りがたにして（昭和二十一年）などである。二首目に「あたたかき春日を避けて」とあるが、茂吉は四季を通して光や熱を直接身に受けることを避けた。

病み後の体いたはり君来にしこの河原年々に荒る  
 河原をもとほり憩ひ給ひける君が杉森の影恋ひて入る  
 来り嘆く君が憩ひの杉森も河原小沼の跡も尋ね得ず  
 遠き人を偲ばむよすがなき嘆き変り荒れ果てし下河原ゆく  
 病みてより弱れる足にしばしばをひとり来給ひ慰め  
 けむを  
 足弱りたる後河原のちにひとり来て老いのいのちを嘆か  
 れにけむ

一、二首目は茂吉が大石田を去ってから二十一年後の、冒頭の歌と同じく下河原での追慕。残り四首には「下河原」の題があり「斎藤茂吉先生散策のところなり」の註がある。茂吉が帰京して三十二年後の作品である。

行くこともなくて過ぎぬし書屋のうへ桂若葉のかが  
やくがみゆ

『礫底』昭和二十三年

桂樹のこまやけき枝紅芽立ち聴禽書屋五度目の春

同・昭和二十五年

雪に傷める長板塀も片づきて書屋の窓に春日ただ照  
る

移り来て病み給ひしより著るく老人さびてありし思  
ほゆ

同・昭和二十七年

ふかぶかと雪に埋もれ人住まぬ聴禽書屋に行くこと  
もなく

同・昭和三十二年

茂吉がおよそ二年間を住んだ聴禽書屋を偲ぶ歌のうち、茂吉が去つてから十年間のものを挙げた。

茂吉が住んでいたころの二藤部家の邸内には聴禽書屋のほか三棟の土蔵が建ち、庭には杉、松、桂、梨、アスナロなどの大木が茂っていたという。一、二首目はそのうちの桂の大木を詠んでいる。茂吉も「この庭にそびえてたてる太き樹の桂さわだち雷鳴りはじむ」(『白き山』昭和二十一年)と詠んでいる。

四首目「移り来て病み給ひし」は、茂吉が昭和二十一年二月一日という厳寒の中を大石田に移居して三月十日過ぎに左湿性肋膜炎にかかったことをいう。板垣がこのことを悔やみつづけたことは既に述べたことである。

ふか深と雪を被きて静まれる書屋を訪ね来る人らな  
し

『礫底』昭和三十六年

高杉の影くろぐると雪かづく聴禽書屋の片屋根のう

へ

火の気なき書屋冷え冷えと静もれば在りにし人を思  
ひて坐る

襟巻を鼻の上まで巻きつけて座りぬ給ひき面影に顕  
つ

茂吉が帰京して十四年後の作品で、「冬の聴禽書屋」と題詞にある。

一首目は、茂吉の滞在中はアララギを主とする歌壇関係者や出版社関係者などが多く訪れたものだったが今ももう訪ね来る人はない、雪の季節であればなおさらだというのである。二首目はさきに述べたように書屋の建つ庭には杉、松などの大木が茂っていて、それが屋根を覆っているようすを詠んでいる。

四首目。板垣の〈随行記〉によると茂吉は北窓は光がやわらかいからいいと言つてそこを仕事部屋にし、火鉢も「火の気が直接強くあたるのが具合悪くて」と言つてそれに蓋をしたり、炭火を灰で隠したりするのが常で、大石田育ちの者にも茂吉の部屋は寒かったという。そこでの姿を思い浮かべているのである。



# 楽しい時間 29

山本紀久雄

2015年2月28日

今回はロンドンの交通ICカードについて二回に分けてお伝えしたい。

世界の乗車ICカードの名称で、魚類をモチーフにした都市は、香港のOCTOPUS オクトパスとニュージールランド・ウエリントン市の「Snapper スナッパー（フエダイの一種）」、それとロンドンのオイスターカードの三か所である。当然に世界の牡蠣を研究している者としては、ロンドン・オイスターカードに興味と関心を持つ。何故に世界の大都市ロンドンがオイスターと名づけたのか。その背景と理由を説明したい。



香港のオクトパスカードは四方八方に自由に移動できる、という意味と、何でもその足を伸ばしてつかめるといふことから愛称として決まったという。この意味づけはよくわかる。

では、ウエリントンのスナッパーはどのような意味づけで決まったのか。

チャージする = 「Feed the Snapper」(魚にえさをあげよう) なんて、気が利いているじゃありませんか。

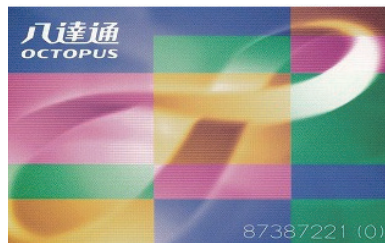
んか、という見解もあるが、このスナッパーはフエダイの一種で、日本では沿岸の岩礁域に生息して、九州沿岸では釣りの対象魚として人気があり南日本（特に沖縄）では重要な食用魚だ。

つまり、世界各地で釣れる魚である。これをウエリントンの乗車券カード名にした背景を調べたく、ウエリントン市役所に問い合わせたところ、以下の回答であった。

「ニュージールランドNZのフィッシングのウェブサイトによると、スナッパーはニュージールランドのフィッシングや食卓料理として最も人気のある魚とあります。国内で広く流通していることから、多くの一般家庭の食卓で見られます。NZの魚をテーマにしたカードのネーミングとしてスナッパーを思いついたのは自然なことと思われるます」

オイスターカード命名の経緯を Wikipedia ウィキペディアの英語版から訳してみた。

「オイスターは固い二枚貝と、またその中に真珠を隠していることから、『安全』、又は『価値』という比喩的意味あいを持つことを理由に、オイスター(という名前)がカード名として推薦された。更にはロンドンのテムズ川とオイスター、そして有名な旅に関するイデオム(慣用句)『世界はあなたのオイスターである』(あなたの人生はともうまくいっている、という意味)にも関連づけている」



この内容、分かったようでもよくわからない。そこで、ロンドン現地で様々な人に聞いてみると、次のような見解だった。

「ロンドンで初めて発行されたスマート・カードだ。ネーミングは大事だから他の都市では使われていない『オイスター』にしたのだろう」

「記憶に残りやすく、シンプルな単語で覚えやすく、そして呼びやすいものとして『オイスター』に決まったのだろう」  
「貝殻の頑丈さからのイメージとして『セキユリティ』と、そして真珠貝（パールオイスター）のイメージから『価値』を表している」

「スマート・カードというものの自体が、導入された当時はとても革新的なものだったので、名前もそれにふさわしく斬新なものにした」

「明確で簡単な英語で、時代や流行を感じさせない名前として『オイスター』にした」

「ローマ時代には、テムズ川でカキが養殖されていた、というロンドンの歴史にも関係している」

「オイスターという名前は『The world is your oyster』の世はあなたの思いのまま』という慣用句にも関連して、オイスターカードを使って、ロンドン公共機関を楽々と移動する、ということにも通じる」

このように「オイスター」ネーミングに様々な見解があるとは、さすがイギリス・ロンドンだ、というべきだろうが、最後のフレーズ「The world is your oyster」これは「世界はあなたのオイスターである」世界はあなた次第でいかにようにもなる「この世はあなたの思いのまま」といった意味



をもつらしいが、このところが日本人の筆者にはよくのみこめないで、これから検討してみるが、その前にJR東日本のSuicaスイカの由来・意味をみてみたい。Suicaという名称は「スイスイ行けるICカード」という意味があることが知られているが「Super Urban Intelligent Card」の略称が元々の由来らしい。親しみやすさを表現するためにSuicaと、果実のスイカともかけており、そのためカードはスイカをイメージした緑色を基調としている。緑色はJR東日本のロゴのカラーでもある。また、ICカードであることを強調するため、Suicaの「i」の部分だけ色を反転させている。また、Suicaのマスケットキャラクターとしてペンギンが採用されているが、このペンギンには名前がなく単にペンギンと呼ばれたり、Suicaのペンギンと呼ばれている。種類は南極大陸に生息するアデリーペンギン「南極から東京にやってきた」という設定になっている。デザインは絵本作家のさかざきはる（坂崎千春）氏である。「改札をスイスイ通れるSuica」と「スイスイと泳ぐペンギン」をかけているようだ。

さすがに日本のネーミング背景説明は機能的で分かりやすく、難しくなく、すんなり入ってくる。ロンドンのオイスターカードはイギリス人らしく「The world is your oyster」の蘊蓄物語があつて、どうもそこにはシェイクスピアが関わっているらしい。説明は次号で。

## 伊賀上野

夏目勝弘

庭の梅が咲き出したが、月ヶ瀬は山間のためまだとは思わが、とりあえず行くこととし一番電車に乗り伊賀上野に向う。亀山より関西線へ電化されていないため気動車、それも小型で少し古いそのエンジン音と震動のすごいこと、そんな車内に一時間。

車窓よりの風景がこの一年で変った。太陽光発電のパネルが特に目につく。

上野市駅に十時到着、案内所で月ヶ瀬の梅のこと、バスのこと等を調べる。梅はまだ蕾バスは十一時十五時十七時の三本のみ。

しかたなくタクシーとおもったが、五千円かかるといふ、梅祭が三月十四日から、その時は臨時バスが出る、電車でも五千円で来れるのでまた来ることにした。

今日は伊賀上野城の石垣と芭蕉のことをと思い上野公園に向う。

木暗い坂を上り少し開かれたところに出た右手の方に芭蕉記念館への矢印が、三百円払い入館だれもない。

玄関の奥に大きな偉大な芭蕉の像、しばし見上げて居た、展示場を一通見、奥の細道紀行三百年記念の本を買ひ出てきた。

しばらく坂を上り城の石垣の補修をしている所を通り天守閣へ、内に入ることなく石垣を見て回った。石垣については稿をあらためて書くことにする。

電車の網棚にも忍者の人数がいる伊賀上野忍者屋敷も一度はと思い、矢印にしたがい歩いて行くと忍者姿の一人が現れた、くのちも居る嬉々として声高に話している近づいてみると中国人の一人である。

早々にその場を離れ城山を下り、芭蕉の生誕の地の市内を歩くことにした。芭蕉という文字や句碑などは目に付くが、芭蕉という人が居たという感じがどうしても伝わらてこない。

○雲と隔つ友かや雁の生き別れの句をのこし江戸に下る(二十九歳)。

一時間に一本の関西線の電車のため街中の散策を切り上げ上野駅に。伊賀鉄道の網棚の忍者の人数の下芭蕉のことを思う間もなく関西線の伊賀上野駅そして亀山へ。

名古屋行の快速に乗れた少し落ちつき、なぜ芭蕉のことが感じられなかったか思いを運ぐらせる。

○野ざらしを心に風のしむ身かな

と吟じ「野ざらしの旅」に出る。

昨年故郷で没した母の墓参をかね、近畿地方に旅立つ、四十一歳。

九月八日兄の家に、死期に会わぬまま亡くなった母の遺髪を握りしめ。

○手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

そして母の一周忌をすませ大和に赴き、西行ゆかりの草庵で

○御廟年経て忍は何をしのお草

○旅人と我が名よばれん初しぐれ

「おくのほそ道」の旅立ちは四十六歳

一所に停車すること短かく旅から旅の末え西国への旅の途中、大阪の花屋仁右衛門の家で

○旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

を夜中に吞舟を呼びこの句を書きとらせたところ。そして

この後、死の直前に

○清滝や波に散込青松葉

の一句を作り十月十二日静かに息を引きとった。

最後の一句は死の直前に頓悟した芭蕉の心の姿だと思ふ。



## 「氷魚」のことから (171) 岡本八千代

作家の司馬遼太郎氏の第十九回菜の花忌が二月七日にすぎた。その時、第十八回司馬遼太郎賞を、小説「ノボさん」を書いた作家の伊集院静氏に贈られた。

この「ノボさん」というのは、正岡子規のことである。私はこの「ノボさん」を読んでよりいっそう子規の世界に入ってきたような気がする。「ノボさん」には、漱石のことも書かれていて「二人の友情は、日本の未来をひらいた」とも本の帯にも書いてあった。

ここからは、前回のつづき、三並良さんの子規の少年時代のことを参考に筆を進める。

- ・ 少年時代にはかなり自由があったこと。
- ・ 学校や、警察から監督はされなかった。
- ・ 遊びに行きたい所なら、山でも、何でも芝居へでも何処へでも行けたこと。
- ・ 読みたいものはみなよんだ。けれど悪所通いは知らなかった。
- ・ 良さんは「環境の中に子規特有の天才はやわらかに芽をふいて行った」という。
- ・ また「子規は上京後、赤坂の漢学塾、神田の英語学校、予備門さては本郷の大学を経て、根岸に於て大成した」とは、皆なその芽ばえを松山の少年時代に見せている」という。

・ また「彼の俳句や短歌を見ると、同じ題の下に、観察点

をちがえて、十首もその餘りも詠じているのがある」とも言う。

・ 「そういう傾向は、既に少年時代に現われていた」彼は客観・ということを力説していた」ともいう。——「自己をも客観視して、それに自己解脱を見出すことは、禅宗の奥義だと私は信ずる」「子規は之を一休和尚から自然に学び得た」と良氏。

・ 「如何に自己を客観化するにしても、たとえ微少であっても自己即ち主観は残る。彼の場合、静かに自己を眺めることは容易ではない。この場合子規には自己の文芸に魅せられて、それが出来たのである」と良氏は言っている。

・ 子規が俳句全集を作るため、何万枚かの写本をやっていたのは、「やはり少年時代に手写の趣味が養われていたからだと思う——分類は普通の人には出来ない業である」と良氏は言うのであった。

・ また子規は、病床で絵筆をとって、自ら楽しんでいたが、今、残っているものより、ずっとたくさん書いたらしいが、その短冊や、色紙なども、「死後にこんなものが残るのは、いやだと云って、多くは自分で破棄してしまったようだ」と。

かくして、子規の少年時代はわりあい自由があった。そうして、自分の体に蓄えらよれたものが、大人になって現実味を帯びてくる。だから自分が自分をつくりあげてゆくよりほかない。文学も科学も、みな芸術か。学問か。真摯に、謙虚に勉強したい私。

## 「歴代天皇御製歌」(三十五)

賈名海屋資料館

『後朱雀天皇』第六十九代・在位一〇三六年(二十八歳)―一〇四五年(三十七歳)

後朱雀天皇は、一条天皇の第三皇子。この御世、なお藤原一族の全盛が続き、藤原公任によって「和漢朗詠集」撰上される。

ほのかにも知らせてしがな春霞かすみのうちにもおもふ心を

(後拾遺604)

春霞のようにほのかであつても知らせたい。あなたを思い遣っている心を

こぞのけふ別れし星も逢ひぬめりなどたぐひなきわが身なる

(後拾遺897)

去年の今日別れた牽牛織女の二星も、再び逢えたよう…どうしてこんなに悲しい我身なのだろう…

現代学生百人一首(二〇一四年) 東洋大学

甥ッ子が小さな手でふれるんだこの世の形全てがおもちゃ

東京都立片倉高等学校 一年 内藤秋音

入部して毎日書いたこのノート最後の文はみんなに感謝

東京都立片倉高等学校 三年 榎戸一貴

突然にヒゲ生えだした十五歳初のヒゲソリ持つ手震える

慶応義塾普通部 三年 今福諒平

ゆずろうか腰を浮かしてまた座るあの人ならまだ準お年寄り

神奈川大学附属高等学校 一年 宮崎由衣

いつてきます言わずに閉めた家のドア一日かけて後悔をする

愛知県光ヶ丘女子高等学校 一年 水野杏美

ことのはスケッチ (436) 今泉由利

『天田愚庵』③ 年譜

△安政元年（一八五四年） 愚庵 一歳

○七月二十日、磐城国平城下、父甘田平太夫（平藩士、号を平遊。母浪（平藩医、林竜沢の次女）の五男として出生。幼名を久五郎。

○この年、ペリーが浦賀に再来航。その対応に幕府存亡の危機が深まる。

△安政五年（一八五八年） 五歳。

○十月十一日 妹のぶ生まれる。

○ハリス来日。

○日米修好通商条約

△安政七年（一八六〇年） 七歳。

○咸臨丸太平洋横断。勝海舟、福沢諭吉、ジョン万次郎らが乗っていた。

△元治元年（一八六四年） 十一歳。

○兄、善蔵（真武）の家督相続。勘定奉行より山奉行に出任。

△慶応二年（一八六六年） 十三歳。

○徳川慶喜十五代将軍となる。

○孝明天皇崩御。

△慶応三年（一八六七年） 十四歳。

○夏目漱石誕生。

○睦仁親王（十六歳）明治天皇となる。

○正岡子規誕生。

○徳川慶喜、朝廷に大政奉還。新政府軍への江戸開城。  
○坂本龍馬暗殺される。  
○明治天皇、最初の閲兵。

△明治元年（一八六八年） 十五歳。

○山岡鉄舟が使者となり、勝海舟と西郷隆盛との会議を成立。

○戊辰の役。

○兄善蔵の出陣。

○久五郎は、元服を認めた父の書面をふところに、兄善蔵の

妻の父、加藤寛左衛門が守備につく谷川瀬の陣へ向った。

これが、母や妹との最後の日となった。

谷川瀬の陣で覚左衛門は、久五郎の前髪を落し、陣中元服

を行った。

○久五郎は陣を抜け出し、戦禍の跡を歩いていて、思いかけ

ない所で「おい久五郎」「父上」と出合った。そしてすぐ別

れる。元服後の侍の姿を父に見せることが出来た。

○幾世橋に平藩の難民に混じる兄善蔵と会う。兄は再び戦場

へ、久五郎は、婦女子を護って相馬より仙台へ落ちのびる。

○父母妹、行方不明となる。

○兵乱鎮まり、仙台より平に帰り、小泉村の瑞光寺に身柄を

△明治二年（一八六九年） 十六歳。

○兄善蔵と小野甚作方に奇遇し、父母妹の行方を探すも手が

かりはなく。

○八月、平藩の藩校佑覧堂が再開され、直ちに入校。

△明治四年（一八七一年） 十八歳。

○七月、廢藩置県と同時に藩校廃止となる。

○兄善蔵、天田真武と改名。

○久五郎も天田五郎と改称。

○この秋、学友伊藤祐之と猪瀬伝一を追い上京。

五郎は、同郷の保科保（後の京都八坂神社宮司）の紹介により、神田駿河台のニコライ神学校に入學。  
○東京・京都・大阪・長野間に郵便開設。郵便切手発行。郵便ポスト。  
○山岡鉄舟、明治新政府に出任。

△明治五年（一八七二年）十九歳。

○五郎、ニコライ神学校をとりだし、神学校の安藤憲三の紹介で、石丸八郎（教部省の役人）を知り、その紹介で小池詳敬（正院大主記）の食客となる。  
○小池詳敬の紹介で山岡鉄舟の門下となり、禅学を受ける。小池の口ききにより落合直亮に国学を学ぶ。  
○明治天皇、はじめて牛肉を召し上げる。  
○太陽歴の採用。  
○新橋、横浜間に鉄道が開通。

○山岡鉄舟、明治天皇侍従に任命される。

△明治六年（一八七三年）二十歳

○三月、落合直亮、仙台志波彦神社宮司として赴任、直亮、神職の傍ら中教院という塾を開く。  
○天田五郎、ここに学び、漢詩の国分青厓と知り合う。  
○小池詳敬に伴われ、石油会社株式募集のため東海道、中国、九州地方へ赴く。  
○政府の征韓論に反対、西郷、板垣、江藤ら参議を辞職。  
○太陽暦実施。  
○明治天皇、率先して断髪。最初の公園、浅草、増上寺、上野台地、富岡八幡、飛鳥山。

△明治七年（一八七四年）二十一歳。

○二月、長崎滞在中、江藤新平の「佐賀の乱」起る。  
○四月、台湾征討、同志と志願して従軍。  
○六月半、討伐終り東京へ凱旋。

○東京市街に初めてガス燈点火。

△明治八年（一八七五年）二十二歳。

○外国郵便の取扱実施。  
○最初の女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）  
○新島襄らが同志社英学校創立。  
○清国談判問題により、伊藤祐之等と警視庁に拘引され、数ヶ月拘留の後、禁獄三十日に処せられる。獄舎に、万葉調の歌人として名を残した丸山作楽と出合う。

△明治九年（一八七六年）二十三歳。

○五年振りに兄真武を郷国に訪い、古郷の城址を訪ね、五郎はじめての歌を詠む。  
『吹く風は 問へと答へず 菜の花の 何処やもとの 住家なるらむ』  
○奥羽諸国から北海道へ、父母妹を搜索の旅に出る。  
○北海道函館にて肺を病む。  
○廃刀令の制定。

△明治十年（一八七七年）二十四歳。

○北海道より帰京。山岡鉄舟の庇護を受け、浅草梅園院寺に病後の身を養う。  
○二月、西南の役。  
○九月、西郷、桐野、増田ら死す。  
○国分青厓、福本日南と、彼らの同級陸調南を知り。また、大山育造、桜井一久、加藤拓川らを知り。また、加藤は正岡子規の叔父。  
○越前、加賀、越中、越後へ、父母妹を尋ねる。  
○東京大学開設。

# 編集室だより【二〇一五年 二月】

☆三河アララギ賞

林 伊佐子様

風に舞ふ芒の綿毛も新天地めざして着地根付きゆくらし

土に草々に、空に、空気に、しつかり住みこなされて  
いるお歌に、沢山の教えをいただき、力をいただいでお  
ります。

○天田愚庵さんは氣宇壮大、自分に厳しくたむろすることを  
好まず、生涯孤高であられ、文才、詩才、和歌、漢詩、書  
……に長けておられた。今を居られる人のように、夢中  
なっている。

○法隆寺。八角田堂。夢殿の本尊。聖徳太子等身像。数百年間、  
白い布で覆われて、誰も見る事のかなわなかった救世観音  
を、模した像を彫るというおこがましいことをしている。  
○「斉藤茂吉記念歌集」へ毎年のように最近作の短歌を送ら  
せていただいた。

○東京北区の新聞に、「詩を、短歌、俳句：吟じてみませんか」  
とあり、反応した。小学生の時、学芸会で「引馬野にはふ  
椀原入り乱れ衣にははせ旅のしるしに」萬葉集巻1・57長  
忌寸意吉麻呂。を先生がオルガンで弾いて下さり、吟じた  
のは私だった。思い出した。父が教えて下さった一番はじ  
めの歌は「田子の浦ゆ打ち出でて見れば真白ぞ不尽の高嶺  
に雪は降りける」だった。まだ一声も発していないけれど、

きつとうまくゆく。

○王子稲荷神社の初午。王子神社と、王子稲荷神社のあ  
る権現山に住んでいるのだから。

一〇五八年〜一〇六五年、源頼義が「関東稲荷総司」とし  
て崇敬していた。江戸期には、王子神社とともに、徳川将  
軍家祈願所であったと。大変な人出で寄り付けないほど。  
知っておかなければ。

○ギャラクシー・ド・ラ・シャンソン。友人のやまざきい  
こさんと四人のシャンソン歌手と、ピアノスト。東京の夜  
とは思われない、パリに居るような、素晴らしさにつつまれ  
ました。

○谷川俊太郎さんの「どうすればおとなになれるか」  
「他人のうちには自分と同じ美しさをみとめ／自分のうちに  
他人と同じ醜さをみとめ／でき上ったどんな権威にもしは  
られず／流れ動く多数の意見にまどわされず／とらわれぬ  
子どもの魂で／いまあるものを組み直しつくりかえる」こ  
れがおとなへの出発点という。心して生きようと思う。

○魅惑のアルゼンチン、映像を見ていた。120年前より牧  
草地だったパレルモ公園に、「ハカランダ」が植えられは  
じめました。ノウゼンカズラ科、学名は、ハカランダ・ミ  
モシフォリア。和名は、桐モドキ。紫雲木。ブエノス・ア  
イレスの夏に近づく十一月頃町中を薄紫にして、それはそ  
れは美しい。その花に埋もれて住んでいました。ハカラン  
ダ材で作ったギターを持っていました。それはそれは美しい  
音色でした。夢と現実とすっかり重なっていたのです。  
○池袋演芸場。落語にゆく。前座のぎこちない落語からはじ  
まり、紙工芸の巧みな手さばき、巧みな話術。二ツ目。少  
しテンポが良くなり、最後に真打ち。沢山笑ってしまった。

## 和菓子街道（102）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 伊勢街道(25)

古くからおはらい町と呼ばれた内宮の門前町。平成の世になって、赤福が巨額の資金を投じておかげ横丁を作り、今では新しいお店が軒を連ねているが、中にはおはらい町の頃からずっと続いている老舗も残っている。そのうちの1軒が藤屋窓月堂だ。

代表銘菓「利休饅頭」は、創業したばかりの頃、伊勢の茶人が千家の宗匠を招いて大神宮茶会を催した際、初代の藤波五左衛門が用意した饅頭を宗匠がお気に召し、千家の家祖・千利休にちなんで「利休饅頭」と名付けたと伝えられている。以来、利休饅頭の藤屋として名を高めた。

ちなみに、藤屋は中曽根康弘元首相の側近で元官房長官の故・藤波孝生氏の実家。そんなこともあって、一時は利休饅頭も「リクル



ート饅頭」などと呼ばれた時期もあったとか…。もっとも、饅頭の味には特段影響はなかったようで、今も地元茶人の間で愛され続けている。

うすら豆の漉し餡入りの白、小豆の漉し餡入りの薄紅、小豆の漉し餡を抹茶入りの薄緑の3種類がある

◆藤屋窓月堂

住所：三重県伊勢市宇治中之切町46-1

電話：0596-22-2418

## お知らせ

▽五月号の原稿は、四月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集三河便り

△二月二十一日三月号の発送を追えたばかりです。滞りなく会員の皆様のところへ発送されることを思って、一番、ほっとする時間です。

私も、今月は、どの歌を選んでくださったかなあと、三河アララギを開く時、胸がときめく思いです。活字になった、自分の五七五七七は、ちよつと気取って、誌面にならんでいます。この私にとって至福の時です。皆様もさつとそうであろうと推察しています。

短歌をやっていて良かった。今月も歌を提出できて良かったと、つくづく思うのです。(小野)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半々分一万円、一カ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半々分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年三月二十五日印刷 第六十二巻 第四号  
平成二十七年四月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘  
平松 裕子・山口 千恵子

### 発行人

今泉 由利

### 発行所

三河アララギ会 〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A  
TEL (〇三)五九二四一〇六五

UR L  
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三三九  
E-mail yuri88@cronos.oon.ne.jp  
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

### 印刷所

株式会社 核 創 美